

■はじめに

校園長の皆さん、こんにちは。

いよいよ2学期が始まりますが、よろしくお願ひします。

さて、ご存じのように、ロンドンオリンピックでは、伏見中学校を卒業された村田涼太選手が、ボクシング・ミドル級で金メダルを獲得しました。私たち、奈良市の教育に携わっている者にとっては、大変うれしい快挙でした。8月27日に、伏見中学校で記念植樹



と奈良市民栄誉賞の授賞式がありました。私もその席に出席したのですが、村田選手の挨拶の中に、次のような言葉がありました。

こういう形で、伏見中学校に戻ってこられたことを誇りに思っています。金メダルを取ったということは、世間ではすごいことだと言われていますが、自分は、少しの才能と少しの努力、そして、人との出会いの運が良かったからだと思っています。

中学校の時の北出先生との出会い、高等学校・大学でのボクシングの恩師との出会い、様々な人との出会いが自分の支えとなりました。

後輩の皆さんも、人との出会いを大切にしていってください。

当時、北出先生と同じ学年を担当していたのが伏見中学校の坪井義夫校長です。坪井校長は、担任の先生が、「何かやりたいことはないのか。ボクシングやったら紹介することができるけど、どうかな？」と村田選手に声をかけたことが、彼とボクシングの出会いだったと当時の様子を紹介してくれました。担任の先生の一言で始まったボクシングが、今回の快挙につながったわけですが、まさに教師冥利に尽きることと思います。

■幼稚園教育（幼児教育）の重要性

このように、子どもに対する一言が、「やる気」や「主体性」を引き出し、その子の人生を方向づけたり将来の扉を開けたりします。今日は、「やる気」や「主体性」について話をします。

子どもたちが、家庭から離れて初めて教育を受けるのが幼稚園です。この幼児期の教育について、興味深い論文があります。ジェームズ・ヘックマンが、科学雑誌「サイエンス」に発表した『就学後の教育の効率性を決めるのは、就学前の教育にある』という論文です。

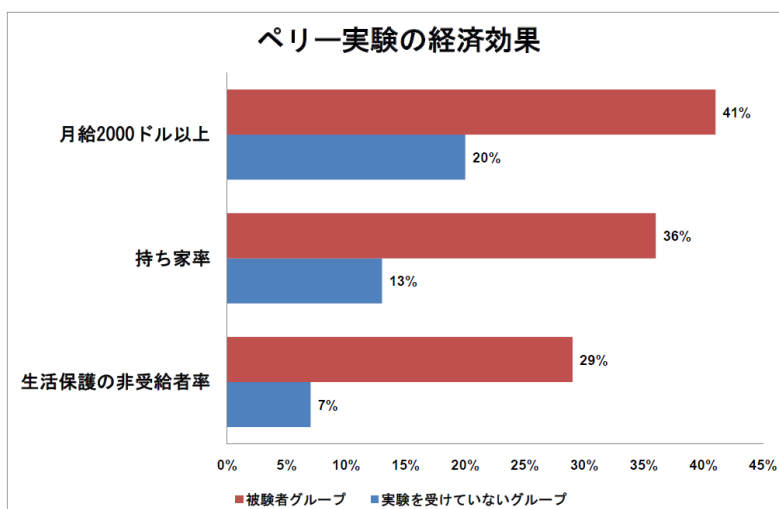
その論文のもととなっているのが、アメリカで1960年代から40年間にわたって追跡調査した『ペリー就学前計画』という実験結果です。この『ペリー就学前計画』は、ある一定の同じ生活状況にある3～4歳児の子どもたちを対象に、2年間幼児教育を継続したグループと、同じような生活状況で幼児教育が行われなかった子どもたちのグループを、40歳になるまで追跡調査をしたものです。その子どもたちが40歳になったとき、平均

所得や持ち家率、生活保護の非受給者率など、様々な項目で両者を比較しました（下図参照）。

ヘックマンは、この違いを脳科学と結びつけながら説明しています。就学前教育を受けた子どもたちの間で一番顕著な違いが表れたのは、IQなどの認知能力ではなく学習意欲や努力・忍耐といった非認知能力の伸びだったといいます。人が持っている能力の発達には、

臨界期が存在します。就学前に適切な教育刺激を受けておかないと、その時期にしか発達しない能力が十分に発達しないのです。幼児期は、遊びや体験の中で様々なことを学んでいきます。泥だご遊び一つからでも、「明日もまた、この遊びの続きやりたいなあ。今日うまくいかなかったところ、明日はどんな工夫しようかな。」と、子どもは、「やる気」や「主体性」といったものを身につけるのではないのでしょうか。このように、子どもの「やる気」や「主体性」を引き出すための刺激を十分に与えておくことが大切であると思えます。

幼稚園教育は、学校教育の入口のところの話ですが、学校教育の出口のところでの興味深いアンケート結果もあります。それは、経済同友会に設置されている「学校と経営者の交流活動推進委員会」が、2010年に実施した「企業の採用と教育に関するアンケート調査（全国230社より有効回答）」の結果です。「大学卒業者を採用する際、ビジネスの基本能力等として、特にどのような能力を重視しているかを15の項目の中から3つ挙げてください。」という質問をしました。その結果、70%の企業が、3つの中の一つに、「熱意・意欲」を選択し、一番高い割合を示しました。私たちが、幼児教育という入口で大事にしていることと、学校教育の出口で社会・企業が求めている力というのは一致していると考えられます。



■奈良市独自の小・中学校学力・学習状況調査の結果から

調査の結果については、様々な視点で分析ができると思いますが、今日は、そのいくつかを紹介します。

国語の学習についての質問項目の中から、いくつかの項目についてグラフ化しました(図①参照)。このグラフから、当然しなければならないことや与えられたことは一生懸命するけれど、自分から学習に向かっていくという「学習意欲」、「主体性」や「やる気」といったところは、まだまだ課題があるということが見えてきます。



もう一つ、これらに関連して少し気になった調査結果がありますので紹介します(図②参照)。このグラフを見ると、「自分のことが好き」「自分には良いところがあると思う」という項目や、「自分は友達や先生から認められていると思う」という意識が、大変低い結果となっています。子どもをしっかりと成長させるためには、自尊感情や、「周りから認められている」といった安心感を、子どもの心に根付かせるような取組、授業の展開が必要ではないでしょうか。それが、「やる気」や「主体性」を育むことにもつながっていくと思います。

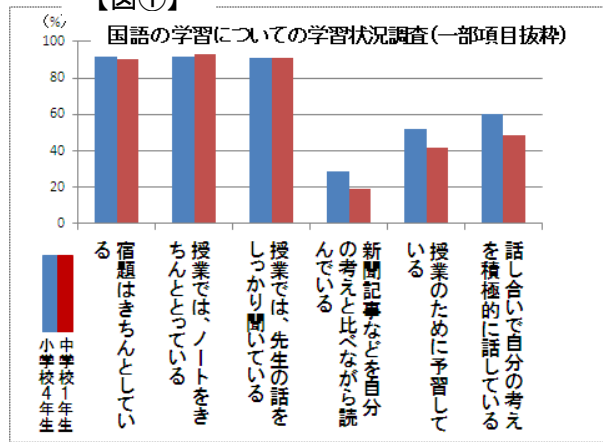
学力・学習状況調査の結果の一部を紹介しましたが、きっと、各校で結果に特色が出ていると思います。どうか2学期の研修等で指導法改善等に役立ててください。

■おわりに

冒頭、村田選手を例にして話しましたが、辛い練習や人には言えない苦しみを乗り越え金メダル獲得という快挙にたどりついた大きな理由は、「やる気」や「主体性」であったと思います。やる気をもって主体的に生きていくことができる子を、一人でも多く育てていきたいと思っています。

まだまだ暑い日が続きますが、体に気をつけて2学期もよろしくお願いします。

【図①】



【図②】

